

エネルギーという枠組みにおける原子力の認知 (3) 原子力対話の枠組みに関する考察

Perception of Nuclear Power in Terms of the Energy Choice

(3) Discussion about Dialogue Framework of Nuclear Energy

*竹中 一真¹, 木村 浩¹, 神崎 典子¹

¹NPO 法人パブリック・アウトリーチ

本研究では、原子力だけでなくエネルギーという枠組みで、参加者へ情報提供し、原子力を含む将来のエネルギー像について参加者間での合意形成を目指すワークショップを実施した。本稿では本ワークショップの枠組みが果たした役割と課題を整理し、原子力対話の枠組み設計に関する示唆を得る。

キーワード: エネルギー選択, 原子力認知, ワークショップ, 原子力対話

1. インタビュー設計と実施

全7回のワークショップ終了後、参加者7名に対しそれぞれ、1～1時間半程度のインタビューを実施した。インタビューでは主に、将来のエネルギーについて、自分自身の意見形成と、他者との合意形成について質問した。自分自身の意見形成については、どのような情報や議論が基となり自身の意見が変遷していったのか、および、より明確な意見形成のためにはどのような情報や取り組みが足りなかったか、という点を質問した。他者との合意形成については、合意形成ができた点・できなかった点を挙げてもらい、それぞれについてなぜ合意形成がうまくできた・できなかったのか、という理由を質問した。

2. 本ワークショップが果たした役割と課題

本ワークショップというケーススタディから見えてきた、原子力対話の枠組みに求められる要素と今後改善すべき課題を、インタビュー分析を基にして整理した。

多くの原子力対話では原子力のみを議題として取り扱うが、本ワークショップではエネルギー全般について「3E+S」という観点から情報提供を行った上で議論を行った。また、将来のエネルギー像を考える際に、原子力のみでなくエネルギーフロー全体を考えた。このようにエネルギー全般の中の原子力として議論することによって、原子力も他のエネルギーと同様の議論の俎上にのせることができた。また、原子力について議論するためには、このような十分な情報提供が必要だという声が多く聞かれた。加えて、エネルギーフローの中で、エネルギーの消費構造（需要側）を議論することによって、将来の自らの生活や社会の変化を想像し、エネルギーをより身近な問題として捉えることにもつながった。

一方、課題としては、将来のエネルギー像を考える上で、参加者にとってイメージが難しい分野の議論が曖昧になってしまい、その結果、各自の意見形成や参加者間での合意形成が難しくなっていた点が挙げられた。イメージが難しい分野とは、具体的には、「エネルギーの消費構造における産業部門でのエネルギー利用の現在、将来の変化の可能性」、「発電部門での技術革新や将来の変化の実現可能性、実現までにかかる時間、規模感」、「原子力の立地地域の人々の生活や意見、思い」、である。そのため、こういったイメージが難しい分野についても十分なコンテンツを準備することが求められる。

* Isshin TAKENAKA¹, Hiroshi KIMURA¹ and Noriko KANZAKI¹

¹Public Outreach, Non-profit.